Title	大災害時におけるキリスト教的応答 ： 教会史から学ぶ（東日本大震災国際神学シンポジウム）
Author(s)	Juan, Martinez 豊川，慎・訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, -No.54, 2013.2 : 69-85
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4734
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【東日本大震災国際神学シンポジウム】

大災害時におけるキリスト教的応答——教会史から学ぶ

ホァン・マルティネス
豊川　慎・訳

神とはどなたであり、神はこの世でどのように働かれるのかという信仰告白の観点から、キリスト者は天災と人災に応答します。私たちは非キリスト者の隣人となって彼らと同じ痛みと苦難に直面して時に神を疑うのですが、起こった事柄を説明し、それに応答するために信仰を頼りにします。

三月一一日の大震災は、神の摂理、被造物への罪の影響、そして神議論や苦難についての神学をどのように理解するのかという問いを日本のキリスト者にもたらしたものと思います。これらすべてはキリスト者が考える必要がある重要な問題であり、これらの事象についての私たちの解釈を形作ります。しかしこの講演ではこれらの問題に焦点を合わせることは致しません。

キリスト者は教会史を通じて直面してきた大災害をある仕方で解釈してきたのですが、その解釈のいくつかを取り上げ、そしてこれらの解釈が即自的にも長期的にもその応答にどのような影響を及ぼしたのかということについて今日は

考えたいと思います。教会史を通じてキリスト者の間の多様な共通の応答を考察し、いかにその経験が二〇一一年三月一一日の出来事によってもたらされた痛みと苦難に応答する日本のキリスト者の助けとなり得るのかということを考えたいと思います。

このため、私は歴史における三つのきわめて重大な大災害を手短に概観し、それらの大災害を経験したキリスト者が、生起した事柄とその意味合いをどのように解釈したのかということを検討しましょう。それらの大災害の一つ一つは災害のただ中を生きたキリスト者に大いに影響を及ぼしましたし、神とこの世での神の御業に関する困難な問いを彼らにもたらしました。しかしこれらの経験はまた変容力のある（transformative）ものでした。それは、それらの経験が災害を経験したキリスト者が自らの信仰や神がどのように自分たちと共に歩んでおられるのかということの理解をどのように解釈したのかということの中に根本的な変化を生みだすという意味においてです。三月一一日の大災害を解釈しようとする時、日本のキリスト者がそして皆さんと共に歩んでいる私たちがそこから何を学び得るのかを問うために私はこれらの経験を挙げたいと思います。

三つの「大」災害を概観していきましょう。それが起こった場においてキリスト者がその経験と解釈の明確な証しをそこに残した災害を概観しましょう。教会史の三つの相違する時期から各出来事を選びます。その一つは近年に起こった事柄を含みます。重大な大災害とはローマ陥落、ロンドン大火、そして近年ハイチで起こった大地震です。神の民が「これはどういう意味なのだろうか」と熟考してきた他の災害についても折に触れて言及します。これらの出来事のそれぞれはキリスト者が自身の信仰、神理解、牧会的応答、そして神がこの世でいかに働かれるかを解釈する思考の枠組みについて深く再考するに至らしめました。他の大災害と同様、これらの出来事はそのただ中に生きたキリスト者に大

きな影響を与えました。外部の者や非キリスト者は何が起こったのかということに関して非常に異なった解釈をし、キリスト者と彼らの信仰を攻撃する根拠としてそれらの出来事をしばしば用いることもあるのですけれども。

信仰の民そして聖書の民として、歴史を通じてキリスト者は自身の経験を解釈するために聖書に訴えてきました。大災害時の間、キリスト者は何が起こったのかを理解する枠組みを与えるために聖書における大災害の経験に訴えてきました。特に、バビロン捕囚（the Babylonian Exile）と嘆きの詩篇（the psalms of lament）は何世代ものキリスト者に神は大災害のただ中でどのようにそしてどこにおられるのかということを理解するための解釈上のグリッドを与えてきました。

キリスト者が大災害に直面する時に生じる重要な神学的、宣教学的、牧会的課題があります。キリスト者は痛みや苦難を経験する際に、必ずしも常に「キリスト教的に」（Christianly）応答してきたというわけではありません。しかし時が進み、視野が広がるにつれ、キリスト者の解釈と応答は進展していく傾向があります。時の経過は必ずしも「より良い」応答をもたらすわけではありませんが、しかしキリスト者は「自分たち」の大災害についての視点と解釈を展開し続ける義務があるのです。時とともに重大な大災害はやがてキリスト者がこの世における神の御業を考えるための新たな機会、新たなパラダイムとなりました。

三つの出来事とキリスト者へのその影響を手短に概観しましょう。その次に、多くの大災害に対する共通した応答と解釈のいくつかを示します。そして最後に、私たちは三月一一日の大災害の「意味を理解」（make sense）しようとしていますので、日本のキリスト者の助けとなり得るかもしれないいくつかの教訓をそこから引き出しましょう。

三つの出来事とキリスト者と教会へのその影響

四一〇年のローマ陥落は多くのキリスト者の間に信仰の危機を生み出しました。ローマ帝国のキリスト教化は多くの人々の間に神はローマ市とその居住者を守られるという感覚や、キリスト教がローマ帝国の公の信仰となったためにローマは特に祝福されているのだという感覚さえ生み出していました。ローマ陥落はそれ自体大災害でしたが、いくつかの事柄がその理解を困難なものにしました。まず第一に、侵略者たちもまたキリスト者であったということです。キリスト者は永遠の都の支配を求めてキリスト者と戦っていました。しかしそれを複雑なものにしているもう一つの問題は、多くの異教徒たちがローマはローマの神々を崇拝することを止めたがゆえに陥落したのだと断定したことでした。この出来事は非常に深刻なものでしたので、アウグスティヌスにとって『神の国』（*City of God*）の中で神の統治の神学を展開することがその枠組みとなったのでした。

ロンドン大火は一六六六年九月二日に起こりました。三日後に大火が鎮火するまでに、ロンドンの八万人の居住者のうちのおよそ七万人の家々が焼失しました。この大災害に対するイングランド中からの応答は迅速かつ惜しみないものでした。教会を通して寄付金が集められ、説教者は多くの場合それを分け与える中心にいました。大火の主たる解釈者は牧師たちでした。これらの援助支援は多様なキリスト教のグループからもたらされましたが、大災害を通じて神はいかに働かれるのかということに関する共通の理解を多くの場合共有していました。その諸解釈は当時のイングランドで起こっていた深刻な宗教的、政治的、社会的変化を反映していました。その出来事は非常に重大なことでしたので、説

教者たちは一世紀以上の間、その出来事を隠喩および準拠点として用いたものでした。

私たちが準拠点として用いたい最後の大災害は近年ハイチで起こった大地震です。二〇一〇年一月一二日の大地震はこの小さな国に大規模な影響を及ぼしました。少なくとも、三〇万人が亡くなり、一〇〇万人が家々を失い、そして少なくとも三〇〇万人がその被害の影響を直接受けました。世界中からキリスト者は即座の必要性に応答しました。ハイチの信仰者はともに苦しむ他の人々とともに「なぜ」と問わざるを得ませんでした。インフラの不十分な貧しい国がなぜわずかな財産を破壊する地震の打撃を受けるのか。確かに、大地震をハイチの人々のブードゥー教の慣行ゆえの神の裁きと解釈したパット・ロバートソンのようなキリスト者もいました。ハイチ大地震はまだ最近のことですので、ハイチのキリスト者がどのように大地震を長期にわたって解釈するのかは未だ明らかではありません。

解釈上の応答

一連の応答には共通した傾向を見ることができます。最初に、必要としている人への迅速な応答があります。その最初の応答の後にキリスト者は解釈上の問いを問い始めます。なぜこのことが起こったのか、これはどのような意味なのか？　神はどこにおられたのか？　なぜ神はこれらの事柄が起こるのをお許しになられたのか？　大災害が非常に深刻なものであるならば、それはキリスト者共同体の解釈上の用語の一部となるのです。

〈キリスト者の応答の要請としての大災害〉

大災害に対するキリスト者の最初のそして最も共通する応答は困っている人々を助けることです。キリスト教の歴史を通じて、キリスト者は苦しんでいる人々に助けの手を差し伸べた最初の人々に含まれます。キリスト教信仰の重要な表出の一つは常に具体的な行動を通じてイエス・キリストにおける神の愛を示すことです。

ローマが陥落したのは戦いのゆえでしたから、その状況は自然災害とはいささか異なっています。しかしアウグスティヌスは、キリスト者の侵略者たちは戦いから逃走する人々やキリスト教会内への避難を求める人々に対して人道的に振る舞ったということを強調しています。つまり、戦争のただ中でさえ、キリスト者は苦しんでいる人々に対して慈愛をもって応答したのです。

ロンドン大火の直後になされた説教の一つで、デビッド・ストークス牧師は、その出来事は「あなたが大いなる慈善の思いを心の内に認めるかどうかを見るに非常に大きな出来事たる猛火の痕跡」であったと述べました。ヤーコブ・フィールドはロンドン大火に関する自身の研究の中で、イングランド中の教会は被害の程を知った時、大変惜しみなく応答したということを明らかにしています。(1)

ハイチ大地震に対するキリスト者の応答についても同じことを言うことができます。すべての大きなキリスト教援助団体やあまり知られてはいない多くの団体、そして教会がハイチに膨大な総額のお金や他の援助を送ることによって必

要としている人々に応答しました。多くのキリスト教団体がハイチにあり、それらの団体は継続的に人々を助け、大震災からの復興を継続して行っています。

迅速な行動と応答の要請は教会への要請にもなります。大災害は、キリスト者が神に近づく必要があるということを認識する時、つねに「試金石」の時となりました。説教者はこれらの時を信仰者のリバイバルのために、そして大災害の中に反映される生の暫定性の観点から神との関係を熟考する時としてしばしば用いるのです。

ロンドン大火の直後になされた説教の多くは「屈伏と断食」を求めました。これらの説教は人々の心に触れましたので、しばしば教会は人々があふれるほどいっぱいでした。[2] すべての説教者がこの世界を摂理的に考察し、全ての事柄の中に生ける神の御手を見ました。こうして、圧倒的多数の人々が、罪深き世界におけるいかなる大惨事も人間の罪に対する神の怒りの象徴と見なされるだろうと結論づけました。[3]

これと同様の精神が大地震後のハイチにおける教会礼拝の多くの中で見られました。死と破壊は神を思い起こし、神を探し求める時を示しているのだと。

〈裁きとしての大震災〉

先の点と関連しますが、大震災を神の裁きや罰とする共通した解釈があります。先に述べたように、ローマ陥落はキリスト者からだけではなくいくつかの視点から裁きと受け取られました。

ロンドン大火は明らかに神の裁きと理解されました。火災は裁きと罰の隠喩となりました。火災は純化し清め得るものですが、それは明らかに神の裁きと同一視されました。ロンドン大火を時の終わりの徴と見なす人々もいました。この大火を裁きと語る説教は人々が悔い改め、神を求めることに関心がありました。

ハイチの大地震もまた神の裁きと解釈されてきました。この点に関して最もよく知られている発言の一つは、ハイチ大地震はハイチの人々が長年にわたってブードゥー教を信奉してきたために起こったのだというパット・ロバートソンによる分析です。

大震災を裁きと考えることに伴って常にある厄介な問題の一つは、神の裁きが「他者」に対するものであることを当然視する傾向にあることです。この視点においては神の裁きは全く「私たち」に関するものではなく、「彼ら」に関するものとなっています。私たちは苦しみにあるかもしれないけれども、それは彼らがしてきたことに対するまさに神の罰であり、そして多分、「彼らを」「彼らの」罪の中にあり続けることを私たちがそのままにしてしまっていることに対する私たちへの罰なのだと。ロンドン大火の後、裁きの理由が、王の罪、カトリック教会の罪、国教会（アングリカン・チャーチ）の罪、あるいは他の政治的、宗教的勢力の罪にあると考えた多くの説教者がいました。このような解釈がエイズの蔓延、九月一一日の出来事、そしてハイチ大地震を説明するために用いられました。いずれの場合にも、「私たち」の罪とは、それが少しでもあるとすれば、彼らに悔い改めを求めることなく、社会の放蕩な姿勢によって他者の罪を「そのまま放置していること」なのだと。

このような視点はまた私たちがどのように神を理解するのか、どのように神が人間の生活に関わっておられるのかという問いをもたらします。大災害は、神の定められた計画の一部分なのか、あるいは人間の罪性の結果なのだろうか？神は大災害を用いられるのか、あるいは大災害を修復するのだろうかと。

〈混乱としての大災害〉

聖書記録の至る所で見られる大災害やキリスト教の歴史における大災害によってもたらされた応答の一つは混乱でした。大災害は人はどのように神を理解し、どのようにこの世における神の働きを理解するのかという難解な問いをもたらしました。旧約聖書において、捕囚はその問いを絶えず抱えています。このただ中にあって神はどこにおられるのか？なぜ神は私たちにこのようなことが起こることをお許しになるのか？　多くのキリスト者の感覚では神は「私たちの側」におられることを前提としているので、もし大災害がその民に降りかかるならば、神は民を配慮なさらず、多分に神は実在しないのかと問うのでした。

これらの問いは大災害がキリスト者――共同体と個人の両方――に襲いかかった時に様々な形で繰り返されました。このような状況は多くの人々に信仰の危機を引き起こしました。この主題に関しての多くのバリエーションがあり、私たちの大災害のそれぞれに関連しています。キリスト者は神に泣いて求めますが、応答がないように思えます。神は沈黙あるいはおられないかのように思われ、すべての希望が失われて見える場合があるのです。

歴史は、ヨーロッパに黒死病が蔓延した間（一三四八―一三五〇年）に多くの人々が信仰を失ったということを私た

ちに伝えています。人々は祈り、教会の中に避難を求めましたが、いずれにしても多くの者が亡くなりました。生き残った人々の多くは放縦なパーティーに身を任せ、虚無的な人生観を展開しました。二つの世界大戦後の西ヨーロッパの人々の間にも同じような応答が見られました。

しかし、混乱はまた深遠な応答を呼び求めました。嘆きの詩篇やそれと類似の文献は大災害や苦悩や混乱状態のただ中で生み出されました。バビロン捕囚期の預言者の説教、『神の国』、ジョン・ダンの詩、カール・バルトの神学、そしてディートリッヒ・ボンヘッファーの著作はすべて大災害と破壊という混乱状態に対する深遠な応答例です。

「神はどこにおられるのか」という問いは諸々の大災害の後にキリスト者が問うた問いでした。その痛みは混乱と同じくらい深刻なものでした。時に同意しかねる神学が争点でしたが、ほとんどの場合に問題は神は痛みと苦しみからほど遠いように思われるということの意味でした。

もちろん、大災害は信仰者ではない人々がキリスト者に疑問を投げかけ、非難する機会にもなりました。アウグスティヌスはキリスト教をローマ陥落の問題と見なした異教徒たちの非難からキリスト教を擁護することに『神の国』の第一部を費やしています。そしてインターネットを少し検索してみると、ハイチ大地震を踏まえれば神は存在しないか、罪深いかどちらかであると主張する多くの記述を見つけることでしょう。

〈新しきものへの開示としての大災害〉

大災害に関連する解釈の一つは長期的に見ることによってのみ解釈することができるというものです。この歴史的な解釈は大災害から生じた肯定的な結果に焦点を合わせます。神は新たな現実を創出するためにこの状況を通じて働かれるのであり、それは通常、社会内のリバイバルや刷新の形で見出されます。ヨーロッパにおける黒死病は前宗教改革の説教者たちや封建主義の終焉の背景となりました。ロンドン大火は新しいロンドンとイングランドにおける宗教的変化に道を開きました。

重要な視点は神は大災害のただ中において働いておられるという信念です。しかしその概念は神が長期にわたって良きものをもたらすために大災害を用いているということです。リバイバルはしばしば苦難の時代の後に続いて起こりました。しかし明らかに、先に見たような信念――つまり私たちが大災害の直後の時期に神の働きを見出すのは、私たちがそれを期待しているためであるという信念――に基づく解釈です。

〈神学的パラダイム転換としての大災害〉

旧約の民にとって、神の民であるとはどういうことなのかを理解しようと求めた時、バビロン捕囚はその問い直しの重要な契機、つまりパラダイム転換の役割を果たしました。出エジプトが自分たちのアイデンティティーを明確にし、試金石としての経験になったとともに、バビロン捕囚もまたユダヤ人が神と世界における神の働きをどのように理解す

るのかということに際して結局はキーポイントとなったのでした。彼らは神が全ての民の神であり、神はエルサレムに限定されはしないということを学ばなければなりませんでした。

数々の重大災害はこれらの出来事とその長期的影響に気を配るキリスト者に神学の再考を促してきました。ローマ陥落はキリスト者に場の神学や人による統治と神の統治の関連性を再定義させました。『神の国』はキリスト教化された国家の中の多くのキリスト者が同型の大災害に直面しなければ忘れがちな神学を私たちに提示しています。

ロンドン大火はロンドンのキリスト者にもイングランドの全ての人にとっても同様の目的を果たしました。大火は神がイングランドにおいてどのように働いておられたかということを解釈するための隠喩であり、徴であり、解釈学上の手段となりました。説教者たちは神が自分たちにどのように語っておられるのかを理解しようとする時、一世紀以上にわたってその大火に言及し続けたものでした。大火は浄化と裁きの隠喩の役割を果たすため、神は人間生活の中でどのように働かれるのか、そして大火がロンドン大災害においてどのように浄化と裁きの両方の役割を果たしたのかということの重要例となったのでした。

このような考えは長期的に最も効果的に起こります。人はこの二〇〇年間に起こった他の重大災害を挙げ、キリスト者はいかにそれらを重要な変化点と考えることができるのか、つまり神が教会と社会に再び焦点を合わせるために大災害のただ中で働いておられるのかもしれないその時として大災害をどのように考えることができるのかということです。黒死病、コンスタンティノープルの陥落、そして世界大戦はその衝撃を経験した人々に同じようなパラダイム転換を引き起こしました。

ハイチのキリスト者が大地震の経験をどのように解釈するのかを見るには今はまだ早すぎます。大地震は人口の大部分の人々に影響を与えたので、長期にわたってその環境における神学思想に影響を及ぼしそうです。このことはまた日本の皆さんにとっても重要な問いでしょう。物質的ダメージは特定の地域に限定されますが、日本人の精神へのダメージは深刻でした。日本のキリスト者、そして日本人一般は長年の間、この出来事を振り返り、神についてどのように考え、世界をどのように理解するのかということに大震災がどれほどの変化をもたらしたのかを見ることでしょう。

諸種の応答から学ぶこと

これらの応答や解釈のすべては過程の一環に他ならないという意見があります。私たちの神学的諸構想はある人にとっては取り組むのにより容易あるいはより困難なものかもしれませんが、それらすべては同じ次元で関わってきます。キリスト者としてもし私たちが、神は世界の中で働かれ、神は人間の状態に配慮されるのだという視点から始めるならば、神はいかに私たちの生活において大きな影響を引き起こす、かの出来事の一部なのかと問わなければなりません。その各々が、働かれる神を私たちがどのように理解するのかということの告白です。バビロン捕囚の預言者たちが流浪の災難という痛みに向かうとともに、民はこの世での神の働きに関する新たな思考のあり方を学んだ時に成長したのでした。

大災害の時に迅速に応答することは神が私たちを通じて働いておられるということを、つまり私たちはこの世におけ

る神の手足であるということを告白することです。もしキリスト者が必要性が生じた時に他者に対して助けの手を差し伸べないならば、イエス・キリストの弟子として歩む私たちの信仰とコミットメントを否定することになるでしょう。他者の必要性に応答することは必ずしも人間の応答というわけではなく、特に他者が私たちの「敵」あるいは部外者である時にはそうであるということを私たちは認めます。初代教会は明らかに必要を求める者を助ける重要性を理解していましたし、キリスト教の最初の数世紀の時代を通じて、非キリスト者たちはキリスト者たちの献身と奉仕を証言しています。キリスト者が特定の国や政府とあまりにも同一視されるようになる時に問題が生じ始め、「敵」を助けることが困難であることに気づくのです。

その上、私たちの人間状態もまた人生の複雑な経験に関する難しい問いを問うことを強います。聖書を通じて私たちは信仰者たちが決して抱くはずはないと思っていた問いを問うことを大災害が余儀なくさせる時に、彼らが信仰と人生に関する深刻な疑念をもっていたのを見ます。

各災害とそれに続く解釈が私たちに求めていることは、神がこの世で働かれると告白することは何を意味しているのかということの特定の局面を考えることです。私たちは神が主権者であられ、人間はちりに過ぎないと告白するのですが、しかし神が苦難と大災害の結果から私たちを救ってくださることを私たちが欲するとともに、大災害はもう一つの事柄を認識することを私たちに強います。働かれる神を私たちはどこに見るのか、そして神が働かれておられるということをどのように知るのだろうかという問いです。

キリスト者としての私たちの課題の一つは、神とはどなたであり、神はどのようにこの世界でそして人間との関わり

の中で働いておられるのかということを神学し理解しようとすることです。大災害が襲う時、私たちはこの課題を避けることはできません。色々な意味で、私たちが信仰の強さと弱さに直面するのは、つまり信仰を磨き明確にする試練に直面するのは生と死の端においてです。しかし、神が教会を通じて、そしてこの世の中で働き続けておられるということを告白できる場所もまたあります。パラダイム転換を迫る出来事は疑いへと導き得るものですが、それはまた神を理解する新たなそして深遠な仕方に導き得るものなのです。

忠実な教会として応答すること

日本社会はいまだ三月一一日の大震災の意味を理解しようとしています。多くの日本人はいかにして海を「飼いならす」か、いかにしてエネルギーの必要に備えるのか、いかにして自分たち自身をそして大都市圏外に住む人々さえも引き受けるか自分たちは理解しているのだと確信していました。三月一一日は私たち人間は小さな存在に過ぎず、どんな人間社会も自然をコントロールすることはできないということ、そして他者の必要性を忘れがちであるということを明らかにしました。

日本のキリスト者は日本社会全体の一部ですから、日本のキリスト者もまたこれらの問いに直面しています。しかし、キリスト教信仰ゆえに、そしてキリスト者は人口のごくわずかな割合のゆえに、これらの問題の端にいると感じているかもしれません。大災害の意味する事柄から離れようとする誘惑もまたあります。なぜならそのことは「彼ら」の問題であり、キリストの再臨を待っている人々の問題ではないからだと。

しかし、私たちがこの地上にいる限り、まるで私たちがその物語の一部ではないかのように、つまりその問題が「彼らの問題」であって「私たちの問題」ではないかのように行動することはできません。それが他のキリスト者たちが他の大災害の中で取り組んだ難解な問いの反復が日本の教会にとってなぜ重要なのかということの理由です。

大震災のキリスト教共同体への影響はそれが三つの側面を含むとき最も変容力あるものとなります。第一に、キリストの名において、必要としている人々への迅速な応答と最も傷ついている人々に仕える意欲があることです。（大震災に迅速に応答したいくつかの日本のキリスト教団体や海外のキリスト教援助団体の名前をこのシンポジウムに見ることができます）。第二に、大災害がキリスト者にとって神との関係やイエス・キリストに従うことへのコミットメントの明確さを反省する機会となるとき、リバイバルと成長があるということです。時間の経過とともに、この過程はまた三つ目の重要な側面である再解釈へ、そしてしばしばパラダイム転換へと至ります。聖霊の力において、決定的な時を読み返すことはキリスト教共同体に成長と成熟をもたらします。それはまた宣教についてのそしてこの世における神の働きにおける自らの役割についての新たな意味を与えるのです。時が経つにつれ、神が新しい現実に向かって特別な大災害を通じて働かれるあり方をキリスト者は見極めることができるようにもなるのです。

三月一一日は日本のキリスト者を差し迫った状況に応答することへと結集させました。歴史的そして神学的相違ゆえに共通点を特定することが難しいと考えてきた諸教会を結びつけました。皆さんは今、熟考のただ中に置かれています。この熟考が日本の諸教会に刷新とリバイバルをもたらすために用いられますように。そして三月一一日が日本社会にとってパラダイム転換の兆しを示し始める時、それは日本のキリスト者が新たな仕方で自分たちを見つめ、日本社会

における役割を再考し、神が日本社会においてどのように働き続けておられるのかを見るための神によって用いられる手段となるのです。皆さんとともに歩みますが遠くから見守る私たちは皆さん方から学ぶことを切望しています。なぜなら神よ、なぜと問うことは明日は私たちの番かもしれないからです。

注

(1) Jacob F. Field, "Reactions and responses to the Great Fire: London and England in the later seventeenth century." School of Historical Studies, Newcastle University を参照。この研究は二〇〇八年七月にニューカッスル大学の博士論文として提出されたものである。デビット・ストークスの引用は二五六頁からのものである。

(2) 引用は次のものによる。"Fire of London" http://en.wikipedia.org/wiki/Great_Fire_of_London. March 6, 2012.

(3) Field, op. cit., p.345.